

香川大学と首都圏大学の対流促進事業におけるライブビデオ配信を活用した インターンシップの実践

Internship Practice Using Live Video Streaming System by Cooperation of Kagawa University and Metropolitan Area's Universities

神田 亮^{*1}, 富士見 沙和^{*1}, 後藤田 中^{*1}, 米谷 雄介^{*1}, 國枝 孝之^{*1}, 八重樫 理人^{*1}
Ryo KANDA^{*1}, Sawa FUJIMI^{*1}, Naka GOTODA^{*1}, Yusuke KOMETANI^{*1}, Takayuki KUNIEDA^{*1}, Rihito
Yaegashi^{*1}

^{*1} 香川大学

^{*1}Kagawa University

Email: kanda.ryo@kagawa-u.ac.jp

あらまし：香川大学は、2018年度より首都圏大学との対流促進事業(うまげなかがわ感じてみまい!うどん県住みます学生プロジェクト)に取り組んでいる。この事業は、それぞれの大学が持つ多様な価値観を持つ人材を集め、新たな価値の創造することで地方創生の実現を目指した取り組みである。本論では、2021年に実施したライブビデオ配信を活用したインターンシッププログラムの実践について述べ、その活用方法や課題について議論する。

キーワード：ライブビデオ配信, ICT, インターンシップ, 大学間連携, 対流促進事業

1. はじめに

香川大学と芝浦工業大学は、内閣府「地方と東京圏の大学生対流促進事業」の採択を受け、2018年から「うまげなかがわ感じてみまい!うどん県住みます学生プロジェクト」(以下、本事業と呼ぶ)を共同で実施している。本事業は、香川大学がCOC事業(地(知)の拠点整備事業)や、COC+事業(地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+))で整備したローカル教育プログラムを芝浦工業大学に提供するとともに、芝浦工業大学がSGU事業(スーパーグローバル大学創生支援事業)で整備したグローバル教育プログラムを香川大学に提供することで、「グローバルを理解したローカル人材」、「ローカルを理解したグローバル人材」の育成を目指した取り組みである。2019年には、津田塾大学と東京農業大学が本事業に参加した。津田塾大学、東京農業大学の参加にあたり、本事業が育成を目指す人材像を「(ローカルやグローバル,都市圏と地方,性別など)様々な価値観を理解しそれぞれが抱える課題を理解するだけでなく、その課題解決の実践がおこなえる人材」と再定義し、それら人材の育成を目指した様々な教育プログラムを実施している。

本事業は、香川県と東京圏のそれぞれで実施される1週間程度のプログラム(短期プログラム)と、2ヶ月～半年程度のプログラム(長期プログラム)から構成される。香川県で実施される短期プログラムは、主に1,2年次を対象とし、香川県でのフィールドワークを通じて地域理解を促す「フィールドワーク型プログラム」、主に3,4年次と大学院生を対象とし、学生の有する専門知識をベースに地域課題の解決を目指す「ワークショップ型プログラム」と、

主に1,2年次を対象とし、地域での就労を通じて地域理解を促す「インターンシップ型(地域理解)プログラム」、実際に地域での就労を意識した、主に3,4年次を対象とした「インターンシップ型(地域就労)プログラム」に分類される⁽¹⁾⁽²⁾。

本論では、2020年度に実施された「インターンシップ型(地域理解)プログラム」、「うまげなかがわの地場産業を感じてみまい!」オンライン1day短期プログラム(以下、本プログラムと呼ぶ)の実践について述べる。

2. 本プログラムの概要について

本事業における、「インターンシップ型(地域理解)プログラム」は、2019年度に3プログラムを実施し、香川大学生27名、東京圏の学生64名、計91名の学生が参加する人気のプログラムとなっている。具体的には、8月に香川県高松市塩江町にある内装工事職人を育成するために作られた「職人育成塾」⁽³⁾で、実際に職人育成の理論や実践を体験するプログラム、9月と2月に香川県内の地場産業や自治体で仕事体験を実施するプログラムを実施した。2020年度においては新型コロナウイルス感染症の影響により対面でのプログラムを実施することができなかったが、オンラインによる短期プログラムを実施した。

本プログラムでは、香川県高松市内における地場産業のうち特に伝統産業にフォーカスを当て、インターンシッププログラムを実施し、香川大学生20名、東京圏の学生34名、計54名がライブビデオ配信システムを通じて参加した。実施方法は、インターンシップ先3拠点と、司会者がいる本部基地、参加者をライブビデオ配信システムで繋ぎ、インター

ンシップ先の様子や伝統産業として取り組んでいる内容について代表の方が実演を踏まえて説明を行った。図1は、本プログラムで実施したライブビデオ配信方法を示す。インターンシップ先では現地に向いている大学スタッフがインタビュアーとして、代表の方に伝統産業として取り組んでいる内容や、参加者からの質問などを聞く役割を担った。

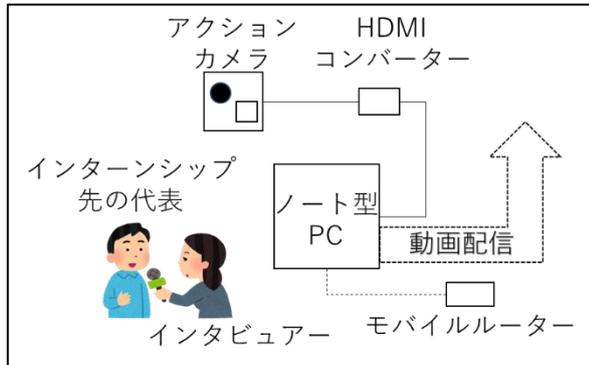


図1. ライブビデオ配信方法

図2は石材工業におけるインタビューの様子を示しており、普段の石加工の様子や、石を加工して作られた生活雑貨などのデザインやプロダクトの紹介を行い、細部にわたる技術の説明も行った。図2が示すように、ライブビデオ配信にも関わらず映像の乱れも殆どなく、細部にわたって映像を確認することができ臨場感ある配信を行うことができた。



図2. インタビューの様子

3. 本プログラムによる効果

本プログラム終了後に本プログラムに関するwebアンケートを実施した。回収率は53.7%であった。本プログラムに関する感想では、「オンラインだからこそ気軽に参加できて個人的にも地方都市はどのような産業か気になっていたので参加できてよかった。地方都市には可能性があることや東京の学生と地方の職人さんが力を合わせれば素晴らしい産業が生まれやすいということもよくわかった。初めて参加したがとても充実した半日となった。地方産業やその商品を見て自分に出来ることは何か常に考えることが大事だと思った。」といった、オンラインで実施し

た本プログラムについて、参加のハードルが下がって参加し易かったという回答に併せて、地方都市での産業に対する理解の深化についてのコメントが寄せられた。また、「自ら考え、生み出す仕事でのチャレンジ精神や伝統継承の面でとても刺激を受けました。コロナ禍ですが大学生でも今できること、新しいことに挑戦してみたいですし、実際に香川県に行きたいと思いました。(中略)本当にテレビを見ているような気分で見入ってしまいました。オンラインではありますが、遠く離れていても繋がれるんだと改めて感じましたし、このような機会をもっと増やして欲しいと思います。」といった、伝統継承に関するコメントや現地での活動意欲を伺わせるコメントや、臨場感が伝わったとのコメントも寄せられた。近年、全国的に事業承継の問題に直面している。今回インターンシップ先となっている伝統産業においても、事業承継の問題は喫緊の課題となっており、担い手を如何に探すかという点で模索している企業も多い。本プログラムでは、離れた地でも技術や技能を画面越しに確認することができ、さらに多人数にも配信が可能であり双方向のやり取りが可能であるため、多くの人材を育成することの可能性も示唆された。

4. まとめ

本プログラムでは、離れた地における伝統産業について理解を深めることができ、インターネット等の情報だけでは知ることのできない情報やプロダクトや技法を獲得することができた。ライブビデオ配信の体験を経て、実際にインターンシップを行うことで、学びの深化や課題解決の方法を事前に準備しておくことができる。さらに、学生とインターンシップ先のミスマッチを無くし、就職につながることも考えられ、そのことで地方創生につながる。

本事業では異なる研究分野や視野・価値観等を持った学生が「様々な価値観を理解しそれぞれが抱える課題を理解するだけでなく、その課題解決の実践がおこなえる人材」を育成することを目指しており、本プログラムに参加した学生たちがオンライン空間でも相互に学習意欲を高め合い、現地でのインターンシップの意欲を向上させることを期待する。

参考文献

- (1) 神田亮, 八重樫理人, 宮本慎宏, 松永貴輝, 長尾敦史, 後藤田中, 米谷雄介, 蟹澤宏剛: “学生交流による香川での建築・建設分野の導入教育の実践とその効果”, 工学教育 Vol.68, No.4, pp51-57(2020)
- (2) 八重樫理人: “うどん県住みます学生プロジェクト — 地方(香川大学)と東京圏の大学(芝浦工業大学, 津田塾大学, 東京農業大学)による人材育成事業—” (特集 大学間による学生交流(国内留学制度)の現状と課題), 大学時報 Vol.392, No.5, pp.28-35(2020)
- (3) 一般社団法人 職人育成塾
<http://www.shokuninjuku.com/> (参照 2021.06.09)